

「軽井沢駅が駅そば発祥の地」調査（その2）

小川亮夫（69 期）

《調査の開始》

私が「駅そば発祥の地」が軽井沢であることの証拠探しを始めたのは、兄（達朗）からの要請による。私たちの実家は軽井沢であり、かつて駅そばの販売に関わっていた。兄は幼い時期に祖母や母から聞いていたことを記録に残したい（私は全く覚えていない）との思いがあり、共に関係資料の収集に取り組むことにした。

また、日経新聞（2016.10.15）の以下の記事も契機となった。



【駅そばの発祥はいつか。「北海道の長万部駅や森駅説はあるが、最も古いと言われているのが長野県の軽井沢駅」。2500 店以上の駅そばの味を知るといふ駅そばライターの鈴木弘毅さんはそう話す。今も JR 軽井沢駅構内で営業するそば店には、駅そば発祥の地の看板がある。

「売り始めたのは旅館を経営する油屋、私の義理の母の小川ヒデです」と話すのは軽井沢町内に住む小川登代子さん（94）。1893 年に軽井沢－横川間に鉄道が開通したが、碓氷峠を越えるけん引専用の機関車が必要。車両付け替えの時間が長かった。このため駅のホームで弁当と、そばを丼に盛り売って回ったという。】

駅そばの元祖について調べ始めた当初、「実用そば辞典」（植原路郎著 東京文献）に鉄道博物館と似通った記載をみつけた。その中では「駅そばの元祖は北海道函館本線の長万部または森駅だと言われている。明治 30 年代に信越線軽井沢の駅そばが旅行者に親しまれた時と、今日とではまったく性格を異にしている。（中略）アプト式蒸気機関車の時代には、横川と軽井沢とでこの特別機関車を付け替えるため 15 分間停車であったから、旅客はそれほど慌てる必要はなかった」とあっただけで残念ながら駅そばの発祥の地を決定するには至らない。軽井沢が駅そば発祥の地であることを証明するためには、長万部駅と森駅における駅そばの営業開始時期が明治 25 年以降であることを証明することが必須となる。

《長万部駅と森駅の調査》

長万部駅における駅そばの創業については、「北海道駅弁史」（平成 10 年 2 月 20 日（社）日本鉄道構内営業中央会北海道北区本部発行）で知ることができた。構内営業の許可を得たのは（有）合田。この会社は大正 15 年 3 月に長万部村にそば店を開業。その後、室蘭本線全線開業（明治 36 年 11 月）を機に、昭和 3 年 9 月に構内営業の許可を得て駅構内にそば店を開業したとのことである。従って長万部駅における駅そばの創業時期は昭和 3 年となる。駅そばの元祖というには時間的に随分開きがあるように思うが、長万部駅では昭和 6 年 9 月から「折詰もりそば」を考案して、当時全国ではじめての試みであると評価され「折詰そばの元祖」とであると人気を得たことから、このことに由来しているのではないかと推察する。

森駅については、「会員の家族とその沿革」によると、阿部商店が明治 37 年に北海道鉄道株式会社（現 北海道旅客鉄道株式会社）の許可を得てホーム立売とホーム売店を開始している。森駅は函館本線（明治 36 年 6 月開通）の主要駅であり、停車時間も長い駅であるため許可された営業であったようである。

《横川駅の調査》

森駅の開業が明治 37 年、長万部駅が昭和 3 年とすると軽井沢駅での開業（明治 25 年）が最も古いことになるが、その時既に構内営業が始まっていた信越本線横川駅についても確認しておきたい。横川駅での構内営業は信越本線の高崎-横川間の開通と同時（明治 18 年 10 月、宇都宮駅に次いで全国 2 番目）で、当時の横川駅は終着駅であったことから旅客サービス上の必要性から荻野屋に許可が下りている。明治 18 年に荻野屋が許可されたのは駅弁の販売のみであったが、明治 26 年の碓氷線開通に伴い長時間の停車駅となったことから構内営業の重要性が増したと考えられ、そのような環境の変化のなかで「横川駅そば」や「峠の釜めし」が誕生していったと考えられる。

《結論：軽井沢駅が発祥の地》

ちなみに軽井沢は明治 21 年 12 月の上田-軽井沢間の開通によって、直江津-軽井沢が全線開通している。横川-軽井沢間のアプト式による開通は明治 26 年となるが、それまでの間は碓氷馬車鉄道会社が鉄道馬車により客貨を輸送していた。終着あるいは始発であった軽井沢駅で油屋は構内ではなかったものの旅の方々に食事（当然そばの提供もあったと考える）や休憩、宿泊などを提供していたようである。これは、森鷗外（もりおうぐわい）の「みちの記」に鉄道馬車で碓氷峠を苦労して越え軽井沢で休息を取ったことが以下のように記述されている。明治 23 年 8 月 17 日のことである。

「軽井沢停車場の前にて馬車はつ。恰（アツカ）も鈴鐸（しやうだく）鳴るおりなりしが、余りの苦しさには乗り遷（うつり）らず。油屋という家に入りて憩う。信州の鯉（こい）はじめて膳（ぜん）に上る、果して何の祥（しあわせ）（ザツ）にや。二時間眠りて、頭やや軽き心地す。」

以上により、森駅の開業は明治 37 年、長万部駅が昭和 3 年、横川駅については明治 26 年以降と考えられることから、「駅そば発祥の地」は明治 25 年開業の軽井沢駅であり油屋旅館がその任にあたったと結論付けたい。

《おわりに》

今回、駅そばの歴史を辿っていくと明治維新以降の日本の産業革命の姿そのものが重なって見えてくる。わずか 20 数年で鉄道を含めた社会インフラが凄まじい勢いで整備され、その周辺に新たな産業が勃興する様に日本人の逞しさや次々に湧き上がるエネルギーといった底力を感じずにはいられない。日本人の気質と古くからの教育や文化が相まってのことだと思うが、本当に素晴らしい活力ある日本がそれほど遠くない時代にあったのだと改めて思う。

最近の日本経済の低迷、モラルの低下、多くの人々が夢も希望も諦めたようなムードが席卷している社会が残念でならない。もう一度みんなが生き活きと目を輝かせて生きられるような世の中になってほしいと願うばかりである。

（2023 年 1 月 15 日 記）

以上